

平成 30 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会

1. 日 時：平成 31 年 3 月 4 日（月） 13：30～15：45
2. 場 所：松江工業高等専門学校 会議室
3. 出席者：

【外部評価委員】

高等教育機関関係

- 秋重 幸邦 氏 国立大学法人 島根大学 理事・副学長（学術研究・イノベーション担当）
大庭 卓也 氏 国立大学法人 島根大学学長特別補佐（地域産業創生プロジェクト担当）

地方自治体関係

- 藤間 博之 氏 公益財団法人 しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

- 小田川 俊明 氏 島根県中学校長会長 松江市立第四中学校長

産 業 界

- 今岡 克己 氏 一般社団法人 松江テクノフォーラム顧問

本校関係者

- 糸原 保 氏 松江高専同窓会 副会長

【本校出席者】

- 平山 けい 校 長
原 元司 副校長（教務主事）
宮下 眞也 副校長（管理運営担当）
村上 享 校長補佐（学生主事）
松本 浩介 校長補佐（寮務主事）
箕田 充志 校長補佐（専攻科長）
堀内 匡 校長補佐（研究担当）
西田 俊一 事務部長
品川 祐治 総務課長
園山 薫 学生課長

4. 日 程

開 会

- (1) 校長あいさつ
- (2) 委員長及び委員紹介
- (3) 本校出席者紹介
- (4) 「本校の将来に向けて」の状況報告

1) 概要 発表者 宮下副校長

2) 教育活動

教育関係 発表者 原副校長（教務主事）
箕田校長補佐（専攻科長）

学生支援関係 発表者 村上校長補佐（学生主事）
森田学生相談室長
松本校長補佐（寮務主事）

研究活動 発表者 堀内校長補佐（研究担当）

- (5) 質疑応答
- (6) 委員による講評
- (7) 校長謝辞

閉 会

開催に先立ち、品川総務課長より資料の確認があり、続いて、開会に当たり、平山校長から挨拶があった。

○平山校長

こんにちは。平山でございます。年度末の大変お忙しい中をお集まりいただき、ありがとうございます。

昨年、本校の学生が起こした事件に関しましては、ご心配等いただき、また、「松江高専、がんばれ」という応援もいただいて、本当にありがとうございました。

本校は再来年度、機関別認証を受ける予定であります。高等教育機関として、的確にPDCAを回して、より良い教育を目指していく予定でございます。そのために、今年度の外部評価にあたっては、内側からでは分からない、外からの厳しい目で、評価に値する、「とても良い」というところはもちろんですけれども、「松江高専、ここは改革していかなければだめだ」とい

う、様々な観点から強化・改善の必要な点をぜひ、忌憚なきご意見をいただければと思っております。頂いたご意見を基に更なる改善、より良い教育に努めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

これから、それぞれの担当管理職がご説明を差し上げますので、どうかよろしくお願いいたします。

議 事

○委員長選出

品川総務課長から、「委員長の選出については、本委員会の規則により委員の互選により選出することとなっているが、島根大学理事の秋重先生にお願いしたい」との提案があり、委員の了解を得た。

○秋重委員長

それでは、先ほど、委員長に任命されました秋重と申します。ここに来るのはこれで4度目でございます。この2月から名称が学術研究・地域連携担当から学術研究・イノベーション創出担当に変わりました。これはご存知のように、内閣府の地方大学創生関係の交付金事業を主担当としてやるということで、この交付金事業につきましても、高専さんと一緒になってやっていこうと思っています。よろしくお願いいたします。

引き続き、各委員の自己紹介、学校出席者の紹介があり、その後「本校の将来に向けて」の状況報告について、資料に基づき、松江高専の発表者から説明があった。

松江高専からの説明後、質疑応答に入った。

○秋重委員長

どうもありがとうございました。

それでは、質問をお願いいたします。

それでは、私のほうから。この自己点検・評価書を見ますと、3つのポリシーのことが随分書かれています。まず、本科ではアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーというのはございますか。

○原副校長

あります。

○秋重委員会

それはどこに明示をされているのでしょうか。

○原副校長

添付資料の最後にホームページのコピーを付けております。

○秋重委員長

そうですか。学校要覧には3つのポリシーが記載されていないのですよね。アドミッション・ポリシーは記載されていましたが。

○原副校長

カリキュラム・ポリシーは載っていません。ディプロマ・ポリシーは学科のところに教育目標として載っています。

○宮下副校長

現在、学校要覧を改訂しております。今年度、文言等も学内で議論を行い、3つのポリシーも別紙資料(ホームページのコピー)のように、次年度以降の学校要覧に載せるという形で、今、改善しております。

○秋重委員長

そうですか。ディプロマ・ポリシーと明示されていなかったりしますので、カリキュラム・ポリシー、教育目標など、言葉がまちまちなので、非常に分かりづらいなと思って見ていました。

それから、このディプロマ・ポリシーというのは、学位の話ですよね。学士なのでしょうけれども。これはすべて工学士になるのですか。

○原教務主事

準工学士です。

○秋重委員長

準工学士。では、専攻科に行って工学士ということになるわけですね。専攻があれば、それぞれの専攻について、学位は同じなのですか。

○箕田専攻科長

学位は専攻科が学士という形になります。

○秋重委員長

全く同じなのですか。

○箕田専攻科長

同じ形になります。専攻科のそれぞれの分野別に、工学の分野で、例えば電気・電子・機械・情報・土木分野で学士を申請しておりまして、最終的に出てくる学士が工学となります。

○秋重委員長

工学で良いわけですね。

ただ、ディプロマ・ポリシーはあるけれど、学科ごとにディプロマは若干違ってきますよね。ディプロマに向かってカリキュラム・ポリシーがあり、それに向かってカリキュラムマップとか、カリキュラムツリーとかがあり、外から見ると、「こういう構成になっているのか」というのが分かるような形になるはずですよ。

○原副校長

そのような指摘を受けておりますので、(自己点検・評価書で)少し改善することで挙げております。

○秋重委員長

それから、アドミッション・ポリシーですけれども、アドミッション・ポリシーを見ると、

コミュニケーション能力が優れているとか、色々書かれていますよね。そういう能力を計るための試験がどうなっているかというのが問題になろうかと思うのですけれども、島根大学や普通の大学であればコミュニケーション能力は面接で見るとか、AO入試で見るとか、そのような入試でやっているのですけれども、松江高専の場合は、すべてペーパー試験ですよ。

○平山校長

推薦入試がございます。推薦は面接がありますが、先ほどの教務主事等の説明で、コミュニケーション能力が足りなくなっているというのは、一般入試の学力試験で入った学生で、最近、高専機構で行っているのがマークシート方式になっており、その辺りは見られなくなっているのです、改革が必要だという話です。

○原副校長

コミュニケーション能力を見るということでは、調査書の人物の記録のなかで、行動の記録として評価がされておりまして、本校においても評価の中に加えているので、コミュニケーション能力を見ているのですけれども、それだけでは見られない部分もあるので、少し（調査書の）書き方を変えようと思っております。

○秋重委員長

確かに、アドミッション・ポリシーとして明示するのであれば、それはどういう試験に対応しているかきちんと分かる必要があるのではないのでしょうか。

○原副校長

筆記試験だけでは当然コミュニケーション能力が分かりませんので、中学校でやられている行動記録等は、一応評価の中には加えております。

あと、推薦に関しては面接をしておりますということです。

○平山校長

ただ、現状では、学力で入ってくる学生のコミュニケーション能力がきちんと見られているかということと、多少は問題点があるということで、改革は必要だということにも考えております。中学校への説明も大事だと思います。

○原副校長

少し丁寧にしたほうが良いのかなというように思います。

○箕田専攻科長

専攻科のアドミッション・ポリシーに関しましては、学力におきましては学力検査をしているのですけれども、本校以外の出身者、あるいは過年度卒の学生に関しては面接をしております。

また、推薦入試におきましては、面接等と学力選考をしておりますので、専攻科の学生につきましては、すべて面接が入るという形になっております。

○秋重委員長

はい、分かりました。ありがとうございます。

他に何かご質問なりご意見がありましたら、出していただければと思います。

○藤間委員

原副校長先生の説明の中で少し気になることがあったのですが、今年の春は受験生が増えたのだけれども、内申点が落ちたというお話があったのですけれども。

○原副校長

きちんとデータ化しておりませんが、書類審査した教員によると、「だいぶ下がっている」という話がありました。

○藤間委員

それはいわば、中学校の優秀な生徒が受験する層が落ちたのか、それとも、受験数全体が増えたから、その分調べてみると、全体的な内心が落ちたのか、少しどういう分析をされているのでしょうか。

○原副校長

全体の中学生の数も減っているというのも結構影響があると思いますが、島根県内の中学生6,000人というのは、(広島県の)福山市と尾道市だけで同じ人数の中学生がいるというよ

うに聞いていますので、やはり少なくなってきているというのは恐らく影響があるのだろうなというように思っています。

ただ、これが来年度、中学生の数が6,000人から5,000人を一時的に下回りますが、減っていったときにどうなるかというのはこちらも読めないところがあり、当然そういう学生は受け入れたあとで手間をかけるしかないかなとは思っています。

先ほど原級留置率という数値を見ていただきましたが、増えていくようだと、こちらも考えないといけないかなというように思っています。

詳しい理由に関しては、多分中学生が減ったということが一番大きい原因ではないかと思っています。

○藤間委員

それに併せて、県外からの受験生を増やして、入学者を増やして質を高めるというお話があったのですが、県外から入った学生によって、自動的にというか、大体質が上がるのか、方法としては県内の優秀な中学生、そういう学生たちにどんどん入ってもらって質を確保していくといったことはできないでしょうか。島根県立大学の学長などと話をすると、やはり県外から来た学生というのは、ほぼ間違いなく地元に戻ってしまうとのことで、県内に定着しないということもあるものだから、本当は地元の良い高校生に島根県立大学に入ってもらって、それがそのまま地元定着につながるというようなことを言っておられまして、今のそういう県外からどんどん、色々な意味で受験生が増えていくということは良いことなのですが、その辺りの戦略として、どういうお考えでしょうか。

○原副校長

実は尾道市と高専間で連携があり、合同説明会に松江高専も参加しており、今後、中四国の高専で、お互いに入試を共有して、「他の高専は入れないけれど、松江高専なら合格できるよ」というように、入試をある程度高専間で連携しているという流れもあります。ただ、現状の松江高専200人定員を維持するならば、島根県からの入学生だけでは留年する学生も増えていくということで、県外からも取ろうと思っていますが、寮のキャパシティなどの問題もあるので、限界があるかなと思っています。

入学生の質を高めていくには県外からももう少し増やしても良いかなと思っておりますけれども、県外出身者が2割、3割になるということはまずないだろうとは思っています。また、卒

業生の質を高めていく場合は、ある程度県外のほうにも門戸を広げていくしかないのかなと思っています。

少し心苦しいところですが、県内の入学生を増やして県内に残る学生を増やすということと、卒業生のレベルを保つということのバランスの問題かなと思っていますところ。

○藤間委員

確かに、全体として技術者を育てるのということと、地元就職とか、いくつか要素があるのですよね。

○原副校長

そう考えているということです。特に広島県の県北では、割と優秀な子は広島市内に出るか、松江高専に来るかとかという結構良い流れができていて、例年、三次地区の周辺からはたくさん来てくれているのですけれども、今、道路も良くなったということで、尾道や福山のほうにも少しPRすることも考えていますがそんなに沢山は増えないと思っています。

○平山校長

もう1点、島根県立大学との違いは、年齢が大学は18歳、高専は15歳で入学しますが、15歳で高専に送り込む保護者がどれだけおられるかということも、島根県立大学のように、県外から増えるということはないと思います。学力を維持して、県外から来た優秀な学生たちが影響を与えてくれるということが大事なことだと思っています。

○堀内校長補佐

現状、島根県の中学校が大体95%程度です。そこが島根県立大学との違いで、95%もの県内の中学生が松江高専に入学していて、あとの5%が大体、広島県北部が多いです。十数年前までは10%弱ぐらい三次地区から学生がいましたので、近年特に三次地区も、それから県内もそうですけれども、地元の高校に送るという傾向が強くなってきたので、少し三次地区が減っているという現状があるので、それを少し考えるというところかなと思います。

○小田川委員

私は中学校から送り出すという立場で、何点かお話をさせていただければと思っています。

先ほど学力という話もありました。現場の状況を少しお話させていただくと、3年前から高校入試改革が大きく動いております。その背景にはやはり少子化と、それに伴う学力低下、これが高校入試改革の背景にあるというように思っています。これは当然、島根県の高校生が大学入試に向けての学力が非常に低下している。それに伴って、高校や中学校に学力の向上を求めるものであるという現状があるかと思えます。

そういった中で、公立高校、あるいは私立高校に比べますと、現場の中学校としては、大変高校に対する意識といますか、興味・関心が高い状況にあるというように捉えております。

ほかの高校については、定員割れをする高校が多い中で、非常に高専志向が高いというように捉えていますが、一方では、先ほどおっしゃったように、学力低下が見られるということで、中学校としても、学力を付けていくということは至上的な命題でもありますので、入試から見て、先ほどコミュニケーション能力が乏しいとか、理数系が弱いというような、具体的なところがありましたけれども、高専側から見て、中学生の求める学力といますか、「こういったところをもう少し強化してほしい」、「こういったことが望まれる」ということがありましたら、お聞かせ願えたらなというように思っているのが1点です。

それから、女子学生の割合が20%あるにも関わらず、非常にストレスを抱えているというお話がありました。これは女子に限らずだと思うのですが、今、学校現場で、発達障がいであるとか、学習障がいであるとか、あるいは、最近では愛着障がいという、家庭環境に起因する困り感を持った生徒が非常にたくさんいます。

高校では、いわゆる通級指導という形で、そういった特性を持っている生徒に対して、校内で体制を組んで子どもたちのケアにあたるところなのではございますけれども、高専の中でそういった特性を持っている学生の支援体制について、どのような具体的な取り組みがあるかお聞かせいただけますか。

それから、3点目ですが、これも中学校も高校もそうですけれども、いじめ・自殺という、大変な大きな社会問題化した状況を抱えております。国ではいじめ防止対策推進法という法律で、学校でのいじめ防止、これは子どもたちが安心・安全な学校生活を送ることが背景にはあるかと思えますが、もし、高専のほうで、こういったいじめに対策するような取り組み等を考えておられたり、あるいは実際にやっておられたらお聞かせいただければと思います。

長くなりました。3点、お願いします。

○原副校長

まず1点目。中学校の生徒さんに求める学力なのですが、昨年度、理科と数学の入試合格の点数を倍にして、傾斜配点ということで選抜を始めたのですが、今年度の入試は、数学を倍にしたけれども、100点にならない受験生がたくさんいて、100点満点にしか見えないような結果になっており、(高専の入試問題は)島根県の受験生にとって難しすぎて、みんなができないようで、あまり差がついていないという問題点もあります。高専の入試問題はレベルの高い地域に合わせられており、本校のアドミッション・ポリシーとしては、数学と理科の学力が英語や国語より成績の良い受験生を受け入れるようにするため、そういう方針を立てさせていただきました。

実は、学生の受け入れの方針に、「提出物がきちんと締め切り等に出せること」などを付け加えたいと考えており、作文が書けない生徒がいるなど、中学校からの申し送りで、低学年のうちは、作文指導として、ティーチングアシスタントを付けて指導をしている学生も何人かいます。また、文章が書けるに越したことはないのですが、一番大事なモチベーションというか、興味の問題で、成績は良いけれども、あまり机に向かいたくない子というのは、入った時分からどんどん成績が落ちていって、最後はどうしようもなくなるというところもあります。

今、入試で入ったあとで、どういう形で、留年したかはデータで関係をきちんと解析できておりませんで、入試の点と入ったあとの成績とか、内申点と入ったあとの成績の推移とか、そういったものをデータ化して、中学校の先生方にお見せできるようになればなというように思っているところです。

○森田相談室長

学生相談室長です。女子学生の相談件数が多いのはこのところずっとですけれども、比較的相談件数が多いのは、悪いことではないと思っております。逆に男子学生はなかなか相談に来てくれなくて、深刻化してから分かって、どうしようもなくなって学校に来なくなったとか、引きこもったみたいなことが結構あるので、なるべく早期のうちに相談に来るとか、女子学生も、先ほど言いましたように、2割というのは中途半端でして、半分ぐらい女子学生がいればよいのですが、女子のグルーピングというのは色々あるのですけれども、そのグルーピングした中でも、少ないところのグループから外れると、どうしても孤立してしまうとか、女子特有の問題が出てくるのですけれども、それが比較的、相談数は拾えているので、そこはある程度対応はできているかなと思います。

20歳までいくと、途中である程度大人になってきてくれるので、だんだんと沈静化するというか、落ち着いてくるのもここ数年見ているので、早期に対応するというので、今のところは対応できているというように思っております。

それから、うちは中学校からの申し送りもあって、個別な支援が必要だと思う学生に関しては、個別支援委員会のほうで、各担任に任せずに、ワーキンググループをつくって個別支援委員会、個別支援ワーキンググループという形でやっています。

その際には、保護者の方に就学支援申請書という形で、個別で就学支援をしますよと。勉強だけではないのですけれども、そういうことを理解していただいて、個別支援を始めます。

ただ、ネックになるのは、本人の自覚とか、あとは外に情報提供、カミングアウト的に「こういう特性があるので、ここは少し配慮しましょう」というのをオープンにできると良いのですが、なかなか保護者の方も「支援をしてほしいけれど、そこはクローズにしてくれ」というケースが多いので、その辺りを非常に試行錯誤しているところです。

ただ、先ほどもお話がありましたように、TAですね。先生が教えるよりも、先輩が教えてくれる。特に、自分が合う時間に1対1で教えてくれると非常に効果があって、単に数学や物理などだけではなくて、いわゆる優先順位を付けられないとか、整理整頓ができない学生に対しても、先輩から「こうやったら良いよ」というようなアドバイスをもらおうと、結構すんなりと受けてくれる学生もいるので、その辺りを低学年のころからTAを付けてやっとうと。

ただ、従来は試験的にやっているのですけれども、これがどの段階で独り立ちしていけるのかとか、「自分からはできないので、お願いします」というように、お願いできるようになっていくかというところがまだの段階なのですけれども、農林高校さんの情報も聞きながら、色々試行錯誤しながらやっております。

最終的には、いつも入学時に言うのですけれども、「高専というのは、非常に多様性を認める学校だよ」と。今、流行りのダイバーシティではないのですけれども、今年度も70校ぐらいの中学校から入学しております。県内に大体100校ぐらいの中学校があるのですけれども、70校の中学校から来て、そのうちの30校ぐらいは1人しか来ていないという学校なのです。

ですから、「そういう学校だよ」ということを言うと、要するに、「近くに自分と全然違う環境で育ってきた子がいるよ」と。「でも、それが面白いよね」、「色々な子がいたほうが面白いよね」という形でスタートしていくので、その辺りの受け入れができていて、何度も言いますが、自己受容ができていくとうまくいくかなと。

ですから、今年新しくやったのは、島大附属学校園の先生に学習タイプ別の講演をしていた

だいて、「自分の特性を知って、自分のタイプに合った勉強が良いよ」というようにやらせると、実は高専というのは、偏った子たちがたくさんいるということが分かって、僕らもそれが初めて分かったので、簡単に言うと視覚情報。見たものはすごく覚えるのですけれども、聞いたものの情報をあまりインプットしにくい子が非常に多い学校だということが分かって来て、その辺りのことも、特性を生かした指導をしていく。自分も自覚をして向かわせるということが大事だなと思って、ここ数年、また色々なことを試していきたいなと思っております。

○村上校長補佐

まず、入学式の直後に、相談室長からも説明しますが、学生主事のほうからも、入学後すぐのところで話をします。そこで、ルールを守るといふことの大切さと、いじめに関しては、そこで必ず「なぜいけないか」といふような話もします。その後、学年主任を中心として、やはり未然に防ぐといふ、一時的な指導の大切さといふのを担任の先生に徹底しております。

ですから、朝、ホームルームに行ったときに、出欠だけではなくて、一人ひとりの顔色をしっかり見て、担任がしっかりとしたセンサーを鍛えないとだめですといふことを、1年生の担任の先生に、私が学年主任をしているときは必ずするようにして、それを書面にして、学生指導の指針といふことで、これを各担任の先生に渡して読んでいただいていたいました。

一番大切なのは、担任のところでもまずブロックするといふことです。もし、そのような傾向があった場合に、本人たちからどのように話を聞くかといふようなことも含めて、担任任せにするのではなくて、学年会及び学生委員会と相談室も含めて、複数体制で対応するといふようなことを心がけてやっております。

○小田川委員

安心しました。

○秋重委員長

どうぞ、こちらのほうからも。

○大庭委員

手短かに質問させていただきますけれども、教育目標のところ、ほかの分野を融合した境界領域の知識といふのがありますけれども、これは今、現代社会ではすごく必要なものだと分か

るのですが、これを具体的にどのようにするかというのはすごく難しいことだろうと思います。その辺りが書かれていないので、そういう話をしていただけるとありがたいかなというところがあります。

それから、1年生から3年生まで、それから、4年生になったら急に体制が変わるという、学生への支援の仕方とか、そうすると、グラデュアリーに変わっていくのが多分良いのだろうと思うのですけれども、その辺りでどういう工夫をされているのかなというのが思っているところです。

それから、専攻科の方に対しては、大学でもそうなのですけれども、研究主体になってくると、先生方の研究テーマみたいなものがまずあって、それに当てはまるかどうかというようなことが割と多いと思うのです。ところが、ほかの分野も融合したというような考え方をすると、先生方に捉われないで、ほかの先生方とどのように一緒にやっていくか。ですから、学生がどう考えていくかという、そういう仕組みの取り入れ方というのも必要なのではないかなというように思いましたので、その辺りを教えていただければと思います。

○原副校長

まず1点目。他分野との融合という件ですが、実はうちもそういった記録はあまりできておりませんで、5年生でやっているグループ創造工学では、学科横断型の学科に関係のない、例えば「空き店舗等をどう活用しましょうか」とか、「松江市でたくさん余っている溜め池をどう活用したら良いか」というテーマを、市や県からいただきまして、それをグループで解決する。そのテーマの1つで、定住財団さんがつくられた「島根県の進む定住のススメというパンフレットを学生の視点で解説しろ」というものを学生がチームで考えて、「学生が島根県に残らないのは、働きやすさとか家賃が安いとかそういうことではなくて、仕事がないからだ」という、「そういう視点がずれている」というところを問題として指摘してくれたりというのがありますが、他分野との融合というのは、学科の中で閉じていると、やはり解決が難しく、実は学科の再編云々という話を出しましたが、少しそういう意味では、学科や分野を横断する教員でグループをつくって色々やるしかないだろうと思っています。ただ、これには少し問題があって、学科という垣根が本校にはまだ残っていたりします。たとえば、現在行っている学科横断型の実験への参加を渋っている学科もあります。学科再編はハードルが高い側面がありますが、全学科共通科目を通じて学科や分野を横断したり融合する教育が実現できないかな、という私の思いがあります。

あと、指導方法の、徐々にという話があるのですが、一応、松江高専としては高校生と大学課程でということで、切り離してやっていたのですが、問題があって、3年生以下よりも4年生になった時点で、あまり担任が毎日顔を見なくなったことで、学校に来れなくなったりしているところがあったりして、ただ、それで毎日3年生と同じようにホームルームをやって、毎朝40人集まることも、大学生としてどうなのだろうというところがあるので、そういう意味では、4年生以上で問題がある学生の指導をある程度手厚くしたり、3年生までのところでももう少し、毎朝、担任の先生が来て、「こうだ」といちいち指示を出すのではなくて、「掲示板を見に行け」という指導を少ししたほうが良いのではないかなというのは個人的な思いがあります。

○箕田専攻科長

専攻科に関しましては、2専攻ありますが、すべての学生が1つの実験をとりますので、出身学科は5学科ですが、それぞれ別々の出身学科の学生でチームを組んで色々な課題に取り組んでおり、色々な知識や、色々な考えを吸収できるような工夫をしながら実験実習をしています。

ただ、研究に関しましては、一応、今、大学の学位授与機構の専攻は、例えば電気・電子の分野であれば、電気・電子の分野で学位を出しますので、他分野の先生に習うことが難しいですし、主査は出身学科の先生でないと取れないというような制約がありますので、その研究を続けながら、専攻科には30から40人の学生がいますけれども、先ほど申しました実験実習で培ったグループですべての学生が1つの実験実習に取り組みますので、そういったところで知識を得ながら研究を進めていければ良いかなというようには考えております。

○秋重委員長

どうぞ。

○今岡委員

2つほど。1つは企業側の、卒業生を受け入れるという観点から。まず、最近の若者たち全般に言われることですが、とても叱られ弱い、心が折れる、辞めてしまうというようなことをよく経営者から聞きます。高専のほうでも、学生をそういうことに強くする。叱り飛ばして従わせるというのも難しいのですが、しかし、普通の高校とはまた違った指導の仕方

がなされていけばありがたいなと思ったり、普通、部活動などで「走れ」とガンガンしごきまくるという道もあるのでしょうかけれども、クシュンとなったり、試合で負けてガクツとなったり、何かそういうことに弱い人が多くなっている中で、高専のほうで何か気を付けていらっしやることはあるかなと、あれば良いなと思ったりしたのですけれども、そういうことはあまりないのでしょうか。

○村上学生主事

色々な意味での人間力を高めることは非常に大切だと思っています。ただ、高専である以上、エンジニアを育てるといのが大前提にありますので、「しっかり勉強しましょう」というように教員一同となって言っております。

ただ、課外活動の重要性、コンテストも含めて、学生会や部活動、非常に重要であるということを、私、1年生の学年主任を5年連続でしたのですけれども、とにかく毎年何かやろうと。「何かやって、色々な忍耐力、主体性、協調性、そういったようなものを養っていかないと、良いエンジニアにはなり得ませんよ」というような話は、学年集会のときに常にするようには心がけております。

これは私個人の考えです。

部活動を今、削減していこうみたいな話もちろんあるのですけれども、これはきちんとした社会体育が、地域的にきちんできたものであれば良いのですが、今のところそういうわけにはなっておりませんので、やはり中学校、高校、高専も含めて、「課外活動は、やはり教員の校務としてしっかり取り組んでください」ということは学校の先生方に言っております。学生も比較的、「うちの高専は、熱心に課外活動をやってくれている」というように思っています。

○今岡委員

ありがとうございます。

それともう1つ、みんなそのことを思いながら言い出せないでいるのですが、不幸な事件がありました。外に向かっての攻撃という形でニュースに出て、非常に胸が痛かったのですけれども、今度は内に向かっていく世界、現在の高専生で自死をなさった生徒さんはいないものかどうか。これはどうでしょうか。

○平山校長

おります。最近ではないですけれども、おりました。

○今岡委員

なかなか表には出ない話ではあるのですけれども、同じような課題です。

○平山校長

今回の専攻科の学生の件に関しては、本当に皆様にご心配をおかけしました。この件に関しては、今、警察の精神鑑定を受けておりますので、私たちの手からは離れております。

ただ、本校の学生であることは間違いないので、来年度に向けて、先ほど学生相談室長が申し上げましたように、心を育てる施設として、図書館の改修を進めていくように動いております。

あと、叱られ弱いということも出されましたけれども、例えば今年度の新しい事業として行っているもので、機械工学科の2年生が、清心養護学校の子どもたちと共同教育というのをしております。

その中で、清心養護学校の子どもたちは肢体不自由児、それから能力的に不自由な子どもたちも千差万別です。その子どもたちが本当に必要なものを機械工学科の学生がつくると。それはものづくりなのですけれども、うちの学生にコミュニケーションの取りにくい学生がいます。清心養護学校の生徒さんは言葉がしゃべれない方もいます。

しかし、その子どもたちがものづくり、自分のものをつくってくれるということで、笑顔でつくってくれたことがとても嬉しくて、笑顔を見せる。そういうところで、学生は、コミュニケーションがきちんと取れているのです。

何が言いたいかというと、普通の教育ではできない心を育てる教育、打たれ弱いとか言われる学生たちが、言葉がうまくしゃべれない子どもが一生懸命「ありがとう」と伝えたい子どもたちを見ていると、変わってくるのです。そういうことも、学校の教員が教えることができないことを、清心養護学校の子どもたちがうちの学生に教えてくれている。

ですから、この中で閉ざされるのではなくて、外へ出ていくこと、色々なところと関わり合うことで、できることがたくさんあるとは思いますが。改善していかなければいけない点ではあるとは思いますが。

○今岡委員

本当に大変なご苦労だったと思います。乗り越えていただきますよう、お願いします。

それから、最後に1点だけ。島根県の健康福祉部さんのほうで部会を持っていらっしゃる、発達障がい者支援の部会があります。その会の委員もしているのですが、松江高専さんの今回の問題もあつたりしますので、ぜひ情報交流してくださいということを会議の場で言わせてもらいました。連絡があつたかもしれませんが、またぜひ交流していただきますようお願いします。

○平山校長

ありがとうございます。

○秋重委員長

それでは、時間が来ておりますけれども、糸原委員。糸原委員の質問が終わったあと、講評という形でまた流しますので、よろしくお願いします。

○糸原委員

少し組織のところでお伺いしたいのですが、実は卒業生の関係も、かなり女子学生も増えてきたということもあるのですが、教員の方の女性の割合というのは、やはりほかの一般的な組織より少ないのではないかなと思うので、特に一般科はたくさんおられるかと思うのですが、やはり私も行政にいますと、専門科の先生に意見を聞きたい、委員会などを立ち上げたりなど、そういうことがあつたりするときに、やはり女性教員の方の意見も聞きたいという部分が非常に多くて、その辺りの確保の取り組みを教えてください。

○平山校長

女性教員が少ないというのは間違いありません。専門学科の女性教員は、今のところ0で、来年1人入りますけれども、まず、公募の段階で女性教員が応募してこない。応募してきた場合、同等の実力があれば、女性優先という公募の形はとっております。しかし、元々応募がないので、どうしようもないところはあります。

それをどう解決するかというと、全国に51高専ございますので、その中の女性教員に来てというのは、講演に来ていただいたりして、「ロールモデルとして、こういうことをしている」みたいなことはできるかと思うのですが、身近な点では卒業生です。卒業生で活躍して

いる女性の方を呼んで講演していただくということが、今、できていることです。元々公募の
パイが少ないので、如何ともし難いところです。

○原副校長

専門の教員だと、大学もそうですけれども、博士の学位が最低ないと、逆に教員になれない
という資格上の問題がありまして、博士課程で27歳まで学生をやっている女子学生というの
は、工学部で多分数%、化学以外の分野だと多分数%ではないかと思うので、その中でとなる
と、公募してもなかなか受けてもらえないというところがありますので、一般科目の中で高校
の先生などで、女性は増やす余地があるかも分かりませんが、専門はなかなか、増やす
ことは難しいです。来年度4月から1人来ますが、1人は今年度に転勤で出てしまった女性教
員もいますし、たくさん増やすのはすぐには難しいかなと。できるだけ増やしたいと思ってお
ります。

○平山校長

島大の女性教員の方にご協力をいただくみたいなのもお願いしたいところではあります。

○宮下副校長

ただ、一般科目に関しては、最近は女性のほうが多くなっております。国語、英語、社会は
応募がやはり多いので、女性教員を採っております。

○原副校長

高専の教員も、基本として研究という業務がやはり入ってくるので、どうしても学部を出た
だけだとなかなか採りづらいところがあるので、今後、女性の活躍もあって、そういう学位を
取る方も増えてくるだろうと思うのですが、もう少しお時間をいただければと思います。

○秋重委員長

よろしいですか。

○糸原委員

はい。

○秋重委員長

時間が延びてしまいましたけれども、私のほうでまとめても良いですがどうしますか。

(外部委員会委員全員同意)

○秋重委員長

では、私のほうからまとめて講評します。

恐らく色々なところでは一生懸命やられていることが目についているとは思っていますが、今日のところでは、かなり弱いところが指摘されたような気がします。

特に、私のほうから言ったのは、アドミッション・ポリシーなどの3つのポリシーについて、きちんと公表するのであれば、明確に統一した形で公表してください。ホームページにあるだけではいけませんよということです。

そして、その関連性で、入試のところではこういう形のアドミッション・ポリシーに則って入試をしていますとか、そういうことが明確に言えるようにしてくださいということを申し述べました。

それから、藤間委員のほうからは、やはり県内から受け入れて質を確保していく、その努力というのが大事ではないかということ。しかし、内実的なところを見ると、県外からの5%というのは、従来通りからあるものであって、そこの辺りを回復すると。基本の95%というのは県内でやると。

ですから、優秀な学生をどうやって取っていくかということ。中学生の人口はどんどん減っていきますので、かなり難しい課題だと思います。そして、それをどのようにやっていくかということが問われたのだと思っております。

そして、小田川委員のほうからは、これは今岡委員の質問も同じようなことだったのではないのかなど。特に女子生徒がかなりストレスフルであって、精神的に弱くなっているところが目立ちますよということを言われたと思います。

それに対しては、今、通級指導みたいな格好で、学校の中にそういう施設みたいなところを置いて、先生方を置いてやっているというのが今の一般的なやり方になっているので、もう少しそういうことを考えてみたらどうかということではないかと思います。

そういう意味では、臨床心理士をもう少しここに置いてみるとか、島根大学にもありますし、島根大学の附属学校というのが、この通級指導のセンターになっていますので、そういうところとうまく連携しながらやるのも一つの手かなと思っています。

いじめや自殺など、先ほどの不幸な事件もそうかもしれませんが、やはり学生に何らかのストレスが非常に溜まっていて、そこの辺りをどうしていくかというのが一つの大きな課題になりつつあるなというように見えています。

あと、大庭委員のほうから、境界領域の研究をどうされているのですかとか、学生指導をどうされているのか、異分野ではないけれども、1年から3年と、4年と5年の接続の部分、そういう話も出ておりました。

あと、女性教員が少ないという、これは女性がストレスフルであるということとも対応しているのかもしれませんが、やはり相談できるような女性の先生方が何とか確保できれば、それはだいぶ解決できる道があるのかなと思います。

交付金事業で、内閣府のお金をもらってやっているのですけれども、オックスフォードの大学の先生でも、この事業を成功させるのは女性ですということを言われました。ですから、女性の先生を入れて、女性の学生さんをどんどん入れて、そういう鉄鋼など、女子学生があまりいないような分野であっても、女性がたくさんいると。

ですから、この高専だって同じようなことですよね。技術系ですので、女性が非常に来づらいくところだとは思いますが、そこに女性を何とか確保して、それがやはり地元志向を、地元で働いていこうというときに、やはり女性がここにいないといけないので、そこを何とか導くものだと思っておりますので、そういうところが問題なのかなと思って聞いておりました。

それから、図書館の改修の話というのは非常に期待が持てますので、ぜひ、来年ここに来るときには、どういう形のものができるかということを確認に示していただいて、ここで心に少し課題を抱えたような学生さんたちもここで癒されているという、そういう姿がもし見えたら、ぜひ、そういうことをここで出していただければと思います。

最後に私、指摘していなかったのですけれども、研究力や外部資金が少し低下しているように見えたのですけれども、どうでしょうか。今年は12月で締めているのでと言われたので、そのためかもしれませんが。

○堀内校長補佐

教員の人数の関係もございまして、少し教員の人数が今、減っています。また来年度に向けて、増額になるようがんばりたいと思います。

○秋重委員長

そういうところが全体の流れです。足りないところがあれば教えてください。

○大庭委員

1つだけ。今、秋重委員長が女性の研究の話をされたので、少し補足といいますか、お願いといいますか。

私は、「たたら」という授業をしているのですが、女性のほうが受講生が多いのです。受講生が多くて、何年かやって思ったのは、高専さんは中学校を出て、高専だから理系で受けるのでしょうか、高校卒で理系・文系と分かれたよりも、もっと次に行くところで興味があるというか、分散した学生さんが多いのではないかなというように思うのです。

ですから、そのところで、今、校長先生が言われたように、女子学生が少ない分野の学生さんに興味をもう少し、何といいますか、説明できるような、もっと若いところで説明できるような体制を取っていただくと、今、少ない分野の女性の研究者が増えてくるのではないかなというように、そういう期待も寄せさせていただきたいと思います。

○秋重委員長

よろしいでしょうか。

○今岡委員

1つだけお礼を言わせてください。松江高専は地域貢献ということでがんばっていただいています。私の地元の公民館でも、去年の夏の小学校・中学校の子どもたちの集まりの場に高専の学生さんに来ていただいて、ロボット講座などをやって、本当に館長をはじめ、地域のみなさんは大変喜んでおりました。私の地元の公民館だけではないと思いますけれども、ほかの公民館にも出かけていらっしゃると思いますが、本当に感謝しております。ありがとうございます。

○糸原委員

すみません、1点だけ。これはお願いというか、テクノフォーラムさんなどにもお願いですが、専攻科の学生の卒業生が非常に増えてきていて、宣伝するのもなんですけれども、非常に優秀な学生が多くて、私も専攻科の卒業生はもっと評価されても良いのではないかなというように思っていますし、専攻科の教育も素晴らしいし、セミナーの発表なども素晴らしい。キャンパスベンチャーグランプリもかなり良い成績を収めておられます。

専攻科の評価について、ほかの学校と比べたり、本科の学生と比べるのはなかなか難しいですが、何か良い方法があれば、検討いただければと思います。

○箕田専攻科長

専攻科に関しましては、学生の学会での受賞などはホームページに載せて周知するようしております。また、先ほどの専攻科のエンジニアリングデザインの関連した実験では、日本工学教育協会の優秀賞を受賞しており、そのことも学校のホームページに載せております。

できる限り周知していきたいと考えておりますので、ご支援のほど、よろしく願いいたします。

○秋重委員長

それでは、時間がだいぶ過ぎていきますので、この辺りで私から返したいと思います。

それでは、よろしく申し上げます。

○品川総務課長

ありがとうございます。

それでは、最後に平山校長よりご挨拶申し上げます。

○平山校長

本日は本当にお忙しい中、長時間にわたり、ありがとうございます。

学生の持っているストレスに関することは、とても大きな、本校だけではなくて、教育機関として大事な問題だと思います。

そのほか、忌憚なきご意見を的確に頂いて、これを今後の検討課題としてP D C Aを回して、先ほどお話のあった図書館のキャンパス支援センターに関しても、後期から工事に入りますので、その後、どう使われていくかということも注目していただければと思います。

松江高専として動いていきますけれども、島大との連携、色々ところで連携をさせていただいていることが、とても強い後押しになっていますので、今後ともよろしく願いしたいということと、あと、中学校、間違いなく家庭教育から始まっていると思います。打たれ弱い子供たちが来ていますので、ここも連携していかなければいけない。県、松江テクノフォーラム、同窓会とも連携していかなければいけないと思っております。今後とも、ご支援ご協力をお願い

いできればと思います。

本日は本当にありがとうございました。

○品川総務課長

予定の時間を過ぎてしまい、申し訳ございませんでした。以上をもちまして、平成 30 年度
松江高専外部評価委員会を終了いたします。